

書 評

元原告高野達男氏に、事件後数十年を経て直接会いその人格にふれたとき、この最高裁判決の結論がやはり間違っていたのではないかと確信になった、と著者は述べている。著者が現実に取り上げた事件と当事者を出発点とし、現実を変えるために、理論を組み立てていることがわかり、私はこのような著者の姿勢は貴重であると思うし、敬意を感じる。

本書は研究者にはもちろんのこと、この労働の現場をどうにか変えたいと考えている法律実務家や労働組合、労働者にとって、大変貴重な示唆に富む著作であると思う。

(2008年10月・日本評論社・4600円)

(さいとう そのお・弁護士・労働総研常任理事)



中央社保協編

『人間らしく生きるための 社会保障運動 —中央社保協50年史—』

大須 眞治

「職を失った時、病気になった時、……また年をとった人の老後への不安、子どもを保育所へ預けなければならない共稼ぎ夫婦の悩み、安い生活保護基準で満足に療養もできない患者など、私たちの日常には無数の解決しなければならない問題がころがっています。日本の社会保障は、こういった私たちの悩みを解消するにはあまりにも貧弱です。…こんなみじめな生活を強いられなくてすむのではないのでしょうか。勿論、根本的には国の全政策をかえなくてはなりませんし、そのためには労働組合や革新政党を真に力あるものにして闘わなくてはなりません。……このために何よりも行動が大切です。

そのために統一された部隊が必要です」(中央社会保障推進協議会結成において採択されたアピールから抜粋)。このような部隊として、中央社会保障推進協議会(「中央社保協」)は1958年9月5日に結成された。それから50年、中央社保協はその時々での社会保障の問題だけでなく国民生活の根本にふりかかってきた問題を取りこぼすことなく闘いつづけてきた。本書はその輝かしい歴史を書きとどめたものである。

本書により、中央社保協によるたたかいの歴史の一端をみると、1960年代は朝日訴訟闘争、戦争と失業に反対し、社会保障を拡充する大行進、小児マヒから子どもを守る運動、国民年金改善運動。70年代は、医療保険の改善をめざす運動、老人医療費無料化運動、年金闘争。80年代は、健保改悪反対闘争、生活保護「適正化」に対する闘争、老人保健法成立阻止のたたかい、堀木訴訟のたたかい、年金改悪反対の運動、社会保障・社会福祉補助金一括削減とのたたかい、老人医療費引き上げに反対するたたかい、国立病院・療養所統廃合をめぐる労働組合と地域住民との共同闘争。そして90年代には、福祉関連8法の「改正」にたいするたたかい、ナースウエーブ運動、年金・健保改悪とのたたかい、介護保険創設をめぐる運動、消費税増税と「橋本六大改革」をめぐるたたかい、医療改悪のたたかいなどたたかいの数の多さ、領域の広さに驚かされる。

もちろん、中央社保協の運動とても順風満帆

の歩みだけだったわけではない。中央社保協は、日本の労働運動や社会保障運動の特徴と深く結びついて、固有のユニークな性格をもっている。それが中央社保協運動の長所となるとともに、いくつかの特有な困難も経験せざるをえなかった。例えば、中央社保協の役員や会費を定める「規約」ができたのは、結成から1年経った59年9月であったし、89年の総評解散で生じた波乱から抜け出し、新生社保協が再発足するのはようやく90年の11月の第34回総会であったことなど、ユニークな組織であることから生まれたいくつかの困難も、ねばり強い努力により統一を守り前進してきたことなど貴重な運動の教訓も述べられている。

このような経験も持つ中央社保協の歴史を知ること、たたかうことで守られてきた今日の

社会保障制度の持つ重要な意義と同時に、制度の限界をもたたかいを通じて深く認識することとなり、今後より豊かな社会保障制度の実現のために必要なものが何であるかを身を持って知らせてくれるものとなっている。

「最低生活保障というセーフティ・ネットの確立・充実と併わせて、全ての人間が自らの可能性を発揮し、多様な生き方を選択できるための社会的制度群を構築することが」課題であると、本書は結ばれている。そのような社会の実現を望む人がみな本書を読み、闘争の経験を知り、未来の社会構築のために共にたたかうようになることが期待される。

(2008年8月・大月書店・6000円)

(おおす しんじ・事務局長・中央大学教授)